

— 第百拾六号 —

(2012年早春号)

『橋口博之作陶展』 藍らしいうつわ

第10回橋口博之作陶展「藍らしい器」のDMが刷り上がりました。三越日本橋本店でお世話になってから毎年続けていただき、早いもので今年で10回目です。十年ひと昔と言いますが、あっという間の年月です。7回目までは橋口と女房と私と三人四脚で東京のお客様をお迎えしてきました。世代交代を控えて、体力的にも過酷な作陶展の現場から徐々に離れていきました。今年は10回目節目という事もあり、3月20日(火)春分の日だけは会場に立とうと女房と話し合いました。この10年間で特選コーナーに置いていただいたり、日本伝統工芸展に2回入選したり、育ての親としても感無量です。次は青花匠ショップができればなあと夢んでいます。



会 期：
平成24年3月14日(水)～20日(火)
(会期中、橋口が連日来場いたします)

会 場：
日本橋三越本店(東京都中央区)
本館5階 特選和食器サロン

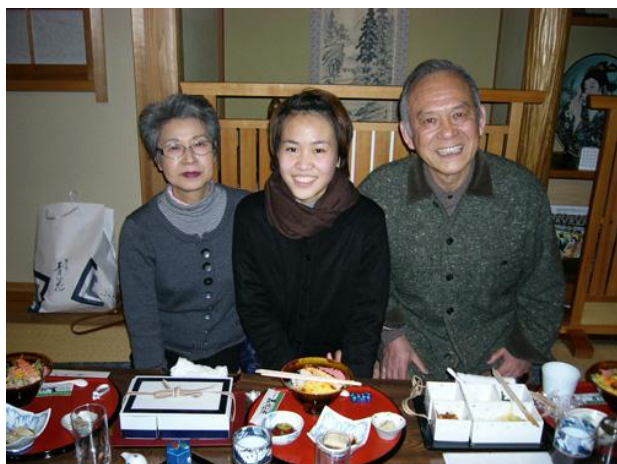
おかげさまで10回目の作陶展となりました。これまでご支援いただいたお客様に心より感謝申し上げます。今回は原点に戻って染付の藍色にこだわり、使いやすい暮らしの器を提案いたします。

MAYちゃんスマイル&そいぎまたネパーティー

3ヶ月の工房現場実習を終えて、1月29日（日）自国タイへ帰りました。お正月休みにはひとりで上京して、美術大学校や美術館をつぶさに見学してきたそうです。大学留学を目指して再来日したいと申ししていました。

MAYちゃん！MAYちゃん！と誰からも声をかけられかわいがられ、全く日本語ができなかったのに、有田弁のそいぎまたネ（それではまたネ）とスースースッ（寒い）を最初に職人さん達から習ったようですが、私達とも日常会話ができるようになり、次第に楽しくなっていました。また、片言ですが、変な英会話が工房内のあちこちで飛び交い、笑いが絶えない工房でした。

1月21日（土）に、今大評判の有田焼五膳を囲んでさよならパーティーを開きましたが、みんな感涙していました。いかにMAYちゃんの存在が大きかったかが分かりました。また日本やタイで再会できる事を願って、やきものづくりにより集中して寂しさを紛らわしたいと思います。MAYちゃん、ありがとうございました。



あのひとあの日

NHK佐賀放送局開局70周年記念ドラマ「あのひとあの日」のロケが、有田町周辺で1月いっぱい行われました。しん窯の登り窯やロクロ室もロケ地として協力しました。佐賀にゆかりのある俳優さんが多く、不破万作さんやはなわ兄弟が出演されていました。何とその中に重要な役柄として、柴本幸（ゆき）ちゃんが出演するではありませんか。第一報を受けた時は、久しぶりの再会で小躍りしました。

お母さんの女優真野響子さんが「娘には、きちんとした、落としたら割れる食器を持たせたいと思っていました。食器は大切に扱うものということ、ものごころが付き始める頃から自然に学んでほしかったのです。」と、「青花」への想いというエッセーで綴っていただいていたいました。1993年の事です。その娘が今回はお母さん役ですから、隔世の感がいたします。兎にも角にも、極寒の中、1ヶ月の長丁場の間、三度も東京と有田を行ったり来たりしてクランクアップされたようです。束の間の休日には、気分転換のため、青花の工房に入って、職人さん達と融合して真剣に焼きものづくり三昧を楽しんでいただきました。「まるで実家に帰ったようです。」と嬉しい言葉をいただき、輝くばかりの旬の女優さんを目の当たりにして、工房も職人さん達もパッと明るく不思議な時空間でした。幸ちゃん、ありがとうございました。

ハマに刻まれた「吾唯足知」

先日、陶芸教室の生徒さんから新聞切り抜きをいただきました。紛れもなくしん窯の「ハマ」です。以下、抜粋します。

1月25日 朝日新聞より ハマに刻まれた「吾唯足知」

「足るを知り感謝の気持ちで生きる」（17日）を拝読し、昨秋11月の日帰り寺社観光バスツアーでのことを思い出した。

佐賀県の弁財天神社で、旅の記念にお持ち帰り下さいと、「ハマ」という8センチの円盤状の白い焼き物を頂いた。それには5文字が刻まれ、中央に「口」、上に「五」、下に「疋」、右に「佳」、左に「矢」。はて何だろうと、誰もが思っただろう。説明文を読み納得した。「吾唯足知」の四つの漢字に含まれる「口」を中央に共有化した「われ、ただ足るを知る」で、京都・竜安寺の「蹲踞」（茶室に入る前に、手を清めるために置かれた背の低いちょうず鉢）に刻まれている言葉として有名だと教わった。

ハマとは、窯の中で磁器の下に敷く粘土製の丸い敷物のことで、ハマを使用せずに直接板の上に載せると、焼き物だけが収縮してしまい、ゆがんで完成する。このため、ハマも同じ割合で収縮する原料を選ばないといけないとのこと。

戦後の貧しい世代の私は、「足るを知る」を肝に銘じて生きてきた。このハマを、いつも見えるサイドボードの中に飾っている。

三代目マルを偲んで

節分の朝、三代目マルのお腹が止まっていました。前日の夜は、息を大きく吸ったり吐いたりしてお腹を動かしていました。「マル！がんばってネ！」と女房と二人で声をかけあい、骨と皮だけになって横たわったままになっているマルに、できる限りのエールを送っていました。

昨年の暮れ突然倒れて、日一日と食事も減り、ここ数週間は水だけで生き抜いていました。「痛い！」「きつい！」とも何も言わないので、どうする事もできません。ただ声掛けをしてじっと見守るしかないのです。そして、倒れてから1ヶ月余り、自然界では大晦日にあたる節分の日に静かに息を引き取りました。享年13年半の短い生涯でした。初めて安らぎの里で火葬をしていただきましたが、元気な時30kgあった体重が何と15kgまで半分になり、びっくりしました。それと共に、生ある限り生き抜く力をまざまざと見せつけてもらいました。しゃべらない動物から人間以上に生きる術を教えてください。信頼する心、我慢する心、忠誠を誓う心、裏切らない心、嘘をつかない心、生き抜く心、など人の道に必要な心をすべて身体いっぱい表現し、私達に伝えてくれます。二代目マルの時そうであったように、三代目マルの死の後4～5日ボーッとしていました。いわゆるペットロス症候群のような表情であったでしょう。そんな中、日頃ごぶさたしている西念寺の井手和尚がお経をあげて下さいました。なぜかそれから二人とも吹っ切れました。井手和尚は、今年の5月19日親鸞上人の降誕会コンサートのちらしを持って来て下さったのに、あまりにもタイミング良くラッキーでした。私は、これも偶然ではなくて必然であると信じたいです。お念仏のおかげで私達二人もどれだけ救われた事か、ほんとうにありがとうございます。マル、安らかにお眠り下さい。合掌

